

Footprint フットプリント

写真資料
調査部会発行
H27.3.1

2015年
第18号

写真入手 テニアン島に運び込まれた長崎原爆 「ファットマン」を組み立てる米兵たち

「長崎原爆戦災誌第一巻 総 説編」が発刊された昭和52年当時、長崎原爆資料館には投下前の長崎原爆「ファットマン」を写した写真は所蔵されておらず、また写真資料調査部会の前身「長崎の被爆写真調査会」、

その後の「写真資料調査部会」も当然この写真を所蔵していなかった。

このため写真資料調査部会が行う写真展で使用していたのは、ファットマンの模型を写したモノクロ写真だった。



アメリカ国立公文書館で公開されているテニアン島の「ファットマン」写真。組み立て、塗装が終わり、運命の長崎投下は間もなくである。左上は機密解除許可印。

長崎原爆ファットマンの現物写真を、わが国で初めて公表したのは民間人で徳山高専教授だった工藤洋三氏

のようで、2005年に自费出版した「写真が語る原爆投下 ヒロシマ・ナガサキをも

たらしめた側の全記録」に掲載した。この写真は米本土から

巡洋艦インディアナポリスや米軍輸送機C54によつて、7月26日から8月2日

にかけて、B29の発進基地である南太平洋テニアン島

に運び込まれた広島と長崎原爆の部品を組み立ててい

る様子を撮影したものである。写真では組み立てが終わ

ったファットマン本体に塗装、あるいは関係者や搭乗員

がサインする様子を写している。

この写真が公表された後、写真資料調査部会では展示

する写真が模型の写真ではおかしいということで、工藤

氏の提供を受けファットマン現物写真を部会主催の「ナ

ガサキ原爆写真展」で使用していた。また平成18年に発刊された「長崎原爆戦災誌第一巻 総説編 改訂版」では、従来の模型写真と合わせ、新しく工藤氏提供の現物写真の二種類を掲載している。

長崎市と長崎原爆資料館は写真資料調査部会の協力を得て、一昨年、昨年と二年連続して、アメリカ国立公文書館

で長崎原爆関連写真の調査と収集活動を行った。この活動

に合わせ写真資料調査部会では調査スタッフに、ぜひテニ

アン島のファットマン写真を探してほしいと要望していた

が、この要望が実現しテニアン島の原爆写真十一点を入手

した。これからは民間からの提供を受けなくても、テニアン島の「ファットマン」写真

を使用することが可能になったのである。

長崎原爆資料館が入手したこれらの写真は、今夏、長崎

平和推進協会写真資料調査部会が主催し、(公財)長崎平和

推進協会、長崎市立図書館等と共催し、長崎市立図書館で開催予定の「ナガサキ原爆写真展」で展示しようと計画している。

長崎原爆ファットマンの大きさは直径1.52m、長さ

3.25m、重さ4.5トンといわれるが(長崎原爆戦災誌)、展示写真は実物大は無理

としてせめて1/2大に拡大したいと思っている。

我々、長崎市民の頭上に投下された「ファットマン」、この原爆のきのこ雲の下で7万

3884人が亡くなり、7万4909人が負傷したという

事実を市民のみなさんに改めて知っていただきたいと思

う。亡くなった被爆者の吉田勝二さんは、原爆による死傷

者の数は、「およそ」とか「四捨五入」で表現すべきではな

いと平日頃語っていた。私も

そう思う。亡くなった人、負傷した人の数は判明している

数字を正確に伝えるべきだと思

う。(堀田武弘記)

昭和20年の新聞から

進駐軍随行科学者が語った当初の原子爆弾投下照準点
長崎市中心部の「賑橋」一帯 全市壊滅を狙う

「雲のため“投下”狂う

全滅を免れた長崎

爆弾威力は広島のご二倍

来崎の米科学者談」

この見出しで原爆投下照準点を報じたのは、敗戦から間もない昭和20年9月16日付の「長崎新聞」(当時)である。

記事は、

「来崎した原子爆弾専門調査団一行中の某科学者の談によれば、原子爆弾による長崎空襲意図は、全市壊滅を狙ったものであるが、当時の天候状況に

災ひされて効果を激減したことが明らかとなった。

即ち米軍が企画した原子爆弾の炸裂位置は、浦上地区と市中心地区、及び対岸地区を結ぶ中央位置、即ち長崎市の“要”の地点である長崎県庁と三菱

長崎造船所を結ぶ線のほぼ中央を予定し、このため米軍搭乗員は十日余りも精密な長崎市街地図と首つ引きで研究し、一方では数回にわたって長崎上空を実際に偵察行動したのであった。

当日、予定地点に原子爆弾を投下させるため島原上空から侵入したB29は、生憎と長崎上空を蔽(おお)ふた無数の雲、風向きに禍(わざわひ)され、市北部に片寄った地点で破裂させた結果となったものである。

長崎空襲に使用した原子爆弾は実に広島市に使用した二倍の威力を有つてをり、予定地点で完全に炸裂した場合は優に長崎全市を壊滅させ得たものである。」と報じている。



旧市街地中心部の空撮。写真左上からカーブし下中央に流れる中島川。矢印が投下目標だった賑橋付近。下中央・中島川河口、左・大波止、右・出島岸壁、中央カーブの内側が長崎県庁廃墟。

日六十月九年十二和昭和

長崎新聞

長崎新聞社 創刊 1905年

雲の爲め投下狂ふ

全滅を免れた長崎

爆弾威力は広島のご二倍

即ち米軍が企画した原子爆弾の炸裂位置は、浦上地区と市中心地区、及び対岸地区を結ぶ中央位置、即ち長崎市の“要”の地点である長崎県庁と三菱長崎造船所を結ぶ線のほぼ中央を予定し、このため米軍搭乗員は十日余りも精密な長崎市街地図と首つ引きで研究し、一方では数回にわたって長崎上空を実際に偵察行動したのであった。

当日、予定地点に原子爆弾を投下させるため島原上空から侵入したB29は、生憎と長崎上空を蔽(おお)ふた無数の雲、風向きに禍(わざわひ)され、市北部に片寄った地点で破裂させた結果となったものである。

長崎空襲に使用した原子爆弾は実に広島市に使用した二倍の威力を有つてをり、予定地点で完全に炸裂した場合は優に長崎全市を壊滅させ得たものである。」と報じている。

苦難の途、長崎再建
復舊だけに一億圓

廿日オーバー
號佐世保入港

当初の原子爆弾照準点は長崎市中心部の「賑橋」一帯を報じる長崎新聞(昭和20年9月16日付 当時)

終戦直後に米科学者が語った「照準地点から外れて原爆は投下された」の談話は、戦後長い間、人々の間で忘れ去られていた。時は経て、このことをよみがえらせたのはNBC長崎放送である。被爆から49年目の平成6年8月、東京の「八王子空襲を記録する会」が入手した長崎原爆関連写真を記者が知り、長崎の投下目標地点は長崎県庁を含む旧市街のほぼ中央だったと報じた。(長崎放送50年史)

発見された写真に記されている縦軸、横軸の数値「114061」が原爆投下の照準点、この数値を座標が入った空撮地図と照合すると、その地点が中島川にかかる「常盤橋」「市電賑橋鉄橋」附近に該当する。もし照準点通りに投下されていたら長崎新聞(当時)が報じた通り、「優に長崎全市を壊滅させ得たものである」の記事通りになっていたのは間違いないだろう。(堀田武弘記)

昭和20年の長崎新聞

岡田寿吉・長崎市長(当時)にインタビュー

戦災復興に長崎市予算の十年分

“市内で雨漏りのしない家屋は皆無”

原子爆弾投下照準点は長崎市中心部に位置していたと報じた「長崎新聞」(昭和20年9月16日付)の同じ紙面に、長崎新聞記者が岡田寿吉・長崎市長(当時)に戦災復興についてインタビューを行っている。見出しは「苦難の途、長崎再建 復旧だけに一億円 岡田市長に聴く“構想”」

面影をしのびつつ、建設の構想を求めて十四日、岡田市長を訪ねた。以下、市長が語る長崎再建の構想――。

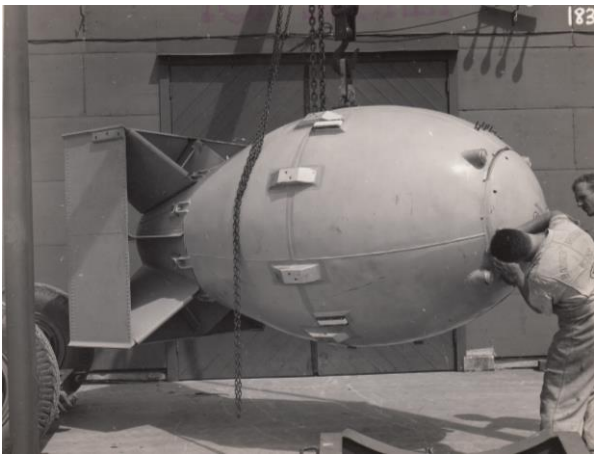
△大長崎建設の百年の構想を求めることもよいが、市内で雨漏りのしない家はないといふ現実を凝視した時、まず現実の復興応急手当が急務ではあるまいか。この意味から差し当り必要な施設として火葬場、伝染病院の新設、学校舎の修理、倉庫の設備、漁港としての魚市場建設等を手をつけるべきだ。さらに市道

や橋梁の修理も絶対に早急の問題である。兎に角、大まかな勘定ではあるが市関係の復旧費だけでも一億円の財源が必要である。

△一億円という厩大(ぼうだい)いな復旧の費用は実に現在の市予算の約十年分で、かつての長崎を再建するためには財政的に非常な苦しみを甘受せねばならぬ。しかも三菱、川南をはじめ各種工場の縮小と市民の減からして、税収入や水道をはじめ各種使用料金の半減を予想されるのだから、

余程、市民が覚悟してかからねば建設どころか復興もできない。全国ほとんどの都市が戦災を受けているのだから、政府の補助にも期待をかけることができず、わずかに起債に頼みかける位のものだ。

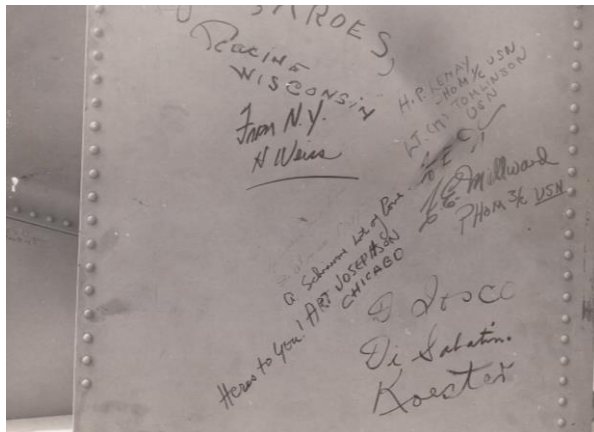
△どんな苦しみを排除しても我等は長崎ツ子(つこ)の名において、この戦災の痛手を癒やし郷土再建の実をあげねばならぬのだが、そのためには自力更生の覚悟をもって恵まれた水産長崎の真価を顕現(けんげん)し、更に食糧確保の空地菜園化に努力せねばならぬ。



テニアン島に運び込まれ組み立てが終わった「ファットマン」



弾頭に自身の名前をサインする主要関係者の一人・ラムジー博士。のちにノーベル物理学賞受賞



原爆本体には多くの人が自分の名前等を書き込んだ



ピットに運ばれ、B29に積み込みを待つ「ファットマン」、本体は機密保持のため“ほろ”で覆われている。(参考・工藤洋三氏著書より)

アメリカ国立公文書館で収集した二〇〇〇枚の写真から③

テニアン島のファットマン

(担当…堀田武弘)

戦時体制下・終戦前後の新聞 新型爆弾投下を報じる地元紙

写真資料調査部会の会報

「フットプリント」では今年に入り、各新聞社の協力を得て終戦前後の紙面を利用させてもらっている。

当時は戦時体制のため、軍の命令により新聞社の統合が行われている。長崎新聞社史

「激動を伝えて一世紀」(平成13年発行)に記されている当時の事情を「社史」年表にしている。

昭和17年4月1日

(県内で発行されていた)「長崎日日」「長崎民友」、佐世保の「軍港新聞」、島原の「島原新聞」が強制統合され、「長崎日報」として発足。

昭和20年7月1日

「長崎日報」を「長崎新聞」と改題、県内移入の「毎日」「朝日」分を合同発行、題字下に「讀売」「毎日」「朝日」のミ

二題字付く。

昭和20年8月9日

原爆で大村町の社屋全焼、新聞発行不能に。出島の旧長崎民友社屋に移転。印刷を(福岡市の)「西日本新聞」に依頼、発行。

なお長崎新聞社史は、この他に非常態勢について記している。

「新聞界は終戦直前、全国の新聞社社長会議を開き、空襲のため一つの新聞社が破壊された場合、他社で印刷、発行できるように相互協定を結ぶことを申し合わせていた。長崎新聞社は西日本新聞社と協定を結んでいたため、十日付から題字だけを「長崎新聞」に切り替えて、「西日本新聞社」で印刷してもらい読者に配布した」と記している。

原爆投下を報じた昭和20年8月10日付「長崎新聞」

は、このような事情により福岡の西日本新聞社で印刷し、題字だけを「長崎新聞」とし読者に配布されたものである。(※長崎新聞と西日本新聞は題字のみが違い、記事は同じ紙面)このような状態はおよそ一か月間続き「長崎新聞」は翌9月14日から自力印刷に戻った。

原爆による火災で県庁周辺にあった大村町の西日本新聞社長崎支局、外浦町の朝日新聞社長崎支局も類焼した。

【下写真・二紙】

長崎に「新型爆弾」投下を報じる昭和20年8月10日付の、右・西日本新聞、左・長崎新聞。題字のみが違うだけで記事は同じ。

(協力・長崎新聞社・西日本新聞社 長崎歴史文化博物館 所蔵)

